

2024年度

小論文B

(問題)

<R06189281>

注意事項

1. 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
2. 問題は2～3ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監査員に知らせること。
3. 解答はすべてHBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
4. 受験番号および氏名は、試験が開始されてから、解答用紙の所定欄に正確に丁寧に記入すること（左の記入例参照）。なお、解答用紙が複数枚ある場合には、それぞれの所定欄に記入すること。所定欄以外に受験番号・氏名を書いてはならない。
5. 受験番号の記入にあたっては、左記（数字見本）にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。読みづらい数字は採点処理に支障をきたすことがあるので、注意すること。

(記入例)

57001番



万	千	百	十	一
5	7	0	0	1

(数字見本)

0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

6. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離さないこと。
7. 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き、解答用紙を裏返しにすること。
8. いかなる場合でも解答用紙は必ず提出すること。
9. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

小論文作成上の注意

1. 句読点、記号等、および改行のために生じる余白もすべて字数に含む。また、解答用紙の字数を超えて解答してはいけない。（句読点、記号等は、必ず独立した一マスを使用する。）
2. 本文中に自分の氏名を書かないこと。
3. 下書きには、別に配付の下書き用紙を使用すること。試験終了後、下書き用紙は持ち帰ること。

次の文章を読んで、設問に答えなさい。なお、文章の一部を省略している。

二〇〇二年十一月、セネガルのダカール市で開かれたシンポジウムに参加した。主催はゲーテ・インスティテュート（ドイツ文化会館）とベルリンの文学研究センターで、ドイツからは作家や学者が招待され、セネガルの作家たちと言葉を交わすことになった。わたしもドイツ語で創作活動をしている作家として招待された。「エクソフォンな作家」という言葉を、今回のシンポジウムを中心になつて企画した研究者ロベルト・シュトゥックハンマーの口から初めて聞いた。これまでも「移民文学」とか「クレオール文学」というような言葉はよく聞いたが、「エクソフォニー」はもっと広い意味で、母語の外に出た状態一般を指す。外国語で書くのは移民だけとは限らないし、彼らの言葉がクレオール語であるとは限らない。世界はもっと複雑になっている。この時にダカールにドイツ語圏から招待されてきた作家たちを見ても、その複雑さが分かる。ギリシャ出身のエレニ・トロツシーとわたしはドイツへの移住者なので、まあ広い意味で「移民」とも言えるかもしれないが、マヤ・ハデラップはオーストリアの国内で生まれ育ったスロベニア人であり、移民ではない。それでも幼年時代はほとんどスロベニア語だけを聞いて過ごした。もちろん現在のオーストリアではそのようなことはありえないが、四十年前にはまだ国内に閉じられたマイノリティの言語空間があつたことになる。両親はドイツ語が話せたが、いつもスロベニア語を話す祖母といつしよに時間を過ごした彼女は「母語」が「祖母語」だったと言う。

それにしても、エクソフォニーという言葉は新鮮で、シンフォニーの一種のようにも思えるので気に入った。この世界にはいろいろな音楽が鳴っているが、自分を包んでいる母語の響きから、ちよつと外に出てみると、どんな音楽が聞こえはじめるのか。それは冒険でもある。これは「外国人文文学」とか「移民文学」などという発想と似ているようで、実は正反対かもしれない。「外から人が入つて来て自分たちの言葉を使つて書いている」という受けとめ方が「外国人文文学」や「移民文学」という言い方に現れているとしたら、「自分を包んでいる（縛っている）母語の外にどうやって出るか？出たらどうなるか？」という創作の場からの好奇心に溢れた冒険的な発想が「エクソフォン文学」だとわたしは解釈した。母語ではない言葉で書くことになつたきつかけがたとえ植民地支配や亡命などにあつたとしても、結果として生まれてくるものが面白い文学であれば、自発的に「外へ」出て行つた文学と区別する必要はないのではないかと。

ある言語で小説を書くということは、その言語が現在多くの人によつて使われている姿をなるべく真似するという事ではない。同時代の人たちが美しいと信じている姿をなぞつてみせるということでもない。むしろ、その言語の中に潜在しながらまだ誰も見たことのない姿を引き出して見せることの方が重要だろう。そのことによつて言語表現の可能性と不可能性という問題に迫るためには、母語の外に出ることが一つの有力な戦略になる。もちろん、外に出る方法はいろいろあり、外国語の中に入つてみるというのは、そのうちの一つの方法に過ぎない。

日本人が外国語と接する時には特にその言語を自分にとつてどういう意味を持つものにしていきたいのかを考えないで勉強していることが多いように思う。すると、上手い、下手だけが問題になつてしまう。そうなつてしまう歴史的背景もあるだろう。特に英語やフランス語など西洋の言語は、日本社会の内部での階級差別の道具として使われてきた。英語が下手だと入試に落ちて一流大学に行けないというだけのことではない。もつと漠然とした「階級意識」の演出に外国語が使われることが今でもある。最近日本のマンガを読んでいたら「このフレンチレストランはメニューもすべてフランス語のみ、高級な客しか相手にしない」という文章があつた。外国語を習うこと、留学することとは「高級に」なること、つまり普通のひとと差をつけて、国内で階級を上へ這い上がるという象徴的な意味を持つているらしい。しかも、誰が上手で誰が下手かということが確実に言えるということは、それを決定する権威が自分たちではなく、どこか「外部の上の方」にあるということだ。

ある。その権威は日本で抽象化された「西洋人」の偶像であり、その権威が、自分の言葉が「上手」かどうかを決めてくれる、という発想である。

日本の劣等感を取り上げるのは時代錯誤で、今の人はそのようなことは問題にしていない、と言う人がよくいる。フランス語を学ぶのは単に楽しいから、パリに行くのは買いたいものがあるから、フランス料理を食べるのは単に美味しいから。それだけのことで、もう劣等感も怨みもどこにもない、何も難しいことなど考える必要はないのだ、と。でも、ヨーロッパ中心主義と日本のねじれた国粋主義の問題は、乗り越えられたかのように見えるだけで、実際には手つかずのまま一万円札の下に埋まっていたような気がする。経済危機の時代が、それらの問題について考え直すいい機会になれば、バブルもはじけがいがあつたと思うが、なかなかそうもいかないようだ。バブルがはじければ今度は、フランス語などの「外国語」は単なる飾りであり贅沢品だからやめて、本当のビジネスに役立つ英語だけやっていればいい、という方針に無反省に移行してしまう傾向が出てくる。それで、日本の大学は英語以外の外国語教育の予算をどんどん削っているらしい。

⑥ 外国語をやることの意味について本気で考えなければ、外国語を勉強することによって逆に国の御都合主義にふりまわされ続けることになってしまう。セネガルからの帰りの飛行機の中で、エール・フランスの出してくれた美味しいお菓子を食べながら、わたしはそんなことを考えていた。

（多和田葉子『エクソフォニ——母語の外へ出る旅』岩波現代文庫、二〇一二年）

【設問】

（一）傍線部①「母語の外に出ること」について、筆者はどのように説明しているか。百五十字以上、二百字以内でまとめなさい。

（二）傍線部②「外国語をやることの意味について本気で考えなければ、外国語を勉強することによって逆に国の御都合主義にふりまわされ続けることになってしまう」とあるが、「外国語をやることの意味」について、筆者の指摘を踏まえつつ具体例を交えながら、あなたの考えを四百字以上、五百字以内でまとめなさい。

【以下余白】

200

150

[illegible]

500

400

300

200

No. 1 / 1

採 点 欄



(解答用紙)

<R06189281>					
受験 番号	万	千	百	十	一
姓					
氏名					

(所定欄以外に番号・氏名を書いてはならない)